

次の文章を読み、設問に答えなさい。なお、この物語の舞台は、私たちの住む世界とは大きく異なっていて、登場する植物や食べ物も私たちの世界とは異なります。

植物で覆われたこの家は、熱い風が吹くたび葉っぱがいっせいにこすれ合って、ざわざわ、さらさらという音でいっぱいになる。壁も天井も穴だらけだけど、カイブの葉っぱが雨粒や強い日差しをふせいでくれて、心地はいい。あたしはここを「緑の家」と呼ぶ——だけど、他の連中はそう呼ばない。①全員、使う言葉が違うから。

5 緑の家にはあたし以外に三人の子どもが住みついている。ひとりあたしよりも背が高い男子で、真っ赤な髪を短く刈り、汚れたタンクトップを着て、腕を曲げると力こぶがにゅっと盛り上がる。ひとりは女子で、やっぱりあたしより背が高い。肌色はあたしと違って銀色で、太陽の光がまともにあたるときらきらして眩しかった。最後のひとりは男か女かわからない。こいつだけあたしよりもうんと背が低く、上下がつながった服のせいでまるで赤ん坊に見える。あたしは心の中でそれぞれを「赤」「銀」「チビ」と呼んでいた。

10 あたしたちは口をきかない。きいたところで意味がわからないし、知らない言葉が耳に入ると不安で、イライラする。それは他の三人も同じらしい。ひとつの部屋にいながら、全員が互いに存在を無視して、関わらないようにしている。コンクリートの床にチョークで線を引いて部屋を四つに分けたところが、めいめいのテリトリーだ。やつらを見なくてすむように、できるだけ壁の方を向いて、葉っぱがこすれる心地よい音だけを聞いて過ごす。もしこの家に二階があれば部屋が増えるのに、はじめから二階の床が抜けていて、顔を上げてみるともう、天井代わりの葉っぱの茂みだ。失われた二階への階段は途中で崩れ、どこへもつながらずに、部屋の真ん中に生えたきのこみたいだった。

15 自分のテリトリーの中ではそれぞれが好きなように過ごしている。赤は毎日筋肉を鍛えていて、物といえば食べ物くらいしか置かない。銀は色とりどりのペンキの缶を並べて、壁にたくさん絵を描いている。チビはさまざまな種類の道具を持ち込んで、小さな手で磨いている。でも使っているところは見たことがない。

20 道具や食べ物は外で調達する。太陽が昇りきらない朝のうちに。やがて昼になり、肉をあぶる火みたい強い日差しが照りつけると、風通しのいい緑の家に戻って眠り、日が沈むのを待つ。夜は一日で一番涼しいから、できれば外に行きたい。けれど夜は大人たちがうろついているし、獣が襲ってくるかもしれない。そもそも持ち

運べる明かりがないので、道にちらばった瓦礫につまずいて転んでしまう。傷口からばい菌が入って死ぬのはいやだ。

25 居眠りしつつ暗い夜を乗り切って空が白みはじめると、獣の遠吠えが小さくなる。立ち上がった後も自分のつま先が見えるようになったら、活動開始だ。あたしはひとり外に出て、まず木陰でうんちとおしっこをする。それから井戸の冷たい地下水で体を洗い、青黒く熟れた酸っぱいハユの実や太った卵白虫なんかを探して朝ご飯に食べ、瓦礫の隙間を覗いて他の人が住んでいる家の前をあさり、めばしい物を探した。あたしのお気に入り「写真」と呼ばれるものだ。運がいいと、写真の上下や横のところに小さな字が書かれている。「雑誌」の切れ端を見つけることもある。字は読めないけれど、「自転車」の写真の雑誌だともっと嬉しい。あたしは自転車に憧れてるから。

30 緑の家の外に本物の自転車がある。たった一台だけ、すぐ手の届くところに。色はピンク、夜が来る前のほんのわずかな瞬間、空の端を染めるあの美しい色と同じピンクだ。あたしはこの自転車に乗りたいたいと思っている。たぶん他の三人も同じだ。赤も銀もチビも、そわそわした視線の行方をたどればすぐにわかる。

35 だけどあたしたちの誰も、この自転車には乗れない。理由は乗ったことがないからじゃなくて、家にそって生い茂るカイブの太い枝がぎゅうぎゅうとからみつき、自転車を外せないからだ。あたしがこの家にたどり着いた時にはもうこの状態だった。きつとずっと昔に誰かがここに置きっぱなしにして、カイブが壁の一部と間違えてからみついたんだらう。大きな葉が日避けになって、自転車のピンク色は色あせずに、きれいなままだ。

40 もし頑丈な道具があれば、自転車を外せるかもしれない。だけどあたしはそんな道具持っていないし、正直、調達しようとはしなかった。本当のところ、あたしだけが自転車を手に入れたところを想像すると、抜け駆けしたみたいで、後ろめたい気持ちになるからだ。

45 自分でも変だと思う。だってあたしは赤も銀もチビも嫌いだ。あいつらが誰なのか知らないし、知りたい気にもならないし、近づきたくない。それなのに、自分の心がもやもやするのはとても嫌だった。なんだか卑怯者になったみたいで。

あいつらの方は何を考えているだろう？ 道具さえあればさっさと自転車をひとりじめしたかも。特に赤なんてあんなに筋肉を鍛えているんだから、本気を出せばカイブくらいどうってことないように思える。ただ、今のところ——少なくともあたしが緑の家に住んでから四九五回分の夜明けを見た今のところは——誰も、自転車に手を出さなかった。

50 いいんだ、自転車が自分だけのものじゃなくても。本物が近くにあるだけでわくわくするし、あたしには自転車の写真もある。拾ってきた切れ端は丁寧にしわをのばして箱にしまった。それで満足だった。ただどある夜のこと、事件が起きた。

あたしのような子どもにとって、夜や暗い場所は危険だ。大人たちがあちこちをうろつき、物を壊したり、盗ったりするからだ。もちろん怖くない大人もいるけど、そういう人は朝に会う人たちであって、夜にうろつくやつらじゃない。

55 その夜、大人たちは緑の家の前まで来て、大騒ぎをした。こんなことめったにないくらい激しく叫び、笑い、壁を叩いた。タララ、トララ、という銃声がすぐそばで聞こえる。あたしはできるだけ体を小さくして両手で耳をふさぎ、大人たちが早くどこかへ行ってしまうように願った。他の三人も同じように黙ってうずくまり、

②嵐が過ぎ去るのを待った。

60 やがて朝が来た。あたしたちは次々に外へ出て、真夜中に大人たちが何をしたのか、確かめた。テリトリーなんかすっかり頭から抜けていた。目に飛び込んできたのは、無残にちぎれたカイブの枝と、むしられて瓦礫の上にちらばった緑の葉っぱだけ。③ピンク色の自転車はどこにも見当たらなかった。

あたしは猛烈に腹が立って、隣にいただけの赤に怒りをぶつけた。どうしてそんなに鍛えているのに大人たちをぶちのめさなかったんだ？ 役立たず！ あたしははっきり口にした。赤に言葉は通じない、けれど意味はしつかり伝わったらしく、赤はあたしに掴みかかってきた。その拍子にあたしは地面に倒され、したたかに背中を打った。銀とチビが止めた入ったけれど、今度は何が起きたのか、今度はそのふたりがけんかをはじめた。

65 ④最初から無視し合ってたあたしたちは、自転車を失って、ますます仲が悪くなった。無関心の方がまだましだった。赤が筋肉を鍛える時の息づかいも、銀のペンキのにおいも、チビがうろちよるするのも我慢できず、もう緑の家にはいられないと思うようになった。

70 明日には出て行こう。あてはないけど、日陰くらいはどこかに見つかるはずだ。そう誓った翌朝、ふいに空が暗くなり、大粒の雨が降ってきた。

ふくれて横になっていると、aサンサクに出ていたらしいチビがずぶ濡れで戻ってくるのが見えた。チビの歩いた後を、黒っぽい足跡と長い紐を引きずった後がくつきりと残っている。毎日毎日がらくた集めをして、何が楽しいんだろう？ あたしはチビに背を向けて、雨粒が葉っぱを叩く音を聞きながら、目をつぶった。

75 すると、濡れた手で頬を叩かれ、あたしは起き上がった。⑤すぐそばにはチビが立っている。おいお前、あたしのテリトリーに無断で入るな！ そう抗議してもチビはひるまない。大きな黒々とした瞳でこちらを見つめ、手の中の太いふたつの紐を差し出してきた。

ひとつは、妙にぶよぶよとした黒い紐だ。意味がわからなくて首を傾げると、チビはだらんと垂れた紐の端と端をつけ、輪っかにした。あっ、と思わず声が出た。あたしは慌てて写真入れの箱を開けて、大切に仕舞っていた写真を取り出す。そこにはこの黒い輪っかとよく似たものが写っている。

80 タイヤだ。自転車のタイヤ。チビはあたしに、自転車を作ろうと言っているに違いない。震える指で写真を差すと、チビは歯のない真っ黒な空っぽの口でつかと笑った。

85 あたしは写真を持っていて、自転車の仕組みなんかまるで知らない。でもこうして、部品になりそうなものがふたつ目の前にあると、自分でも作れそうな気がしてくる。⑥手招きされるまま、あたしはチビのテリトリーに入り、チビが集めた道具を見せてもらった。のこぎりはあたしも知っているけど、ただの尖った細い棒や、はさみによく似た道具など、使い方のわからないものばかりだった。あたしとチビは自転車の写真を眺め、必要な部品を集めることにした。

90 とりあえず雨が止んでからだね。あたしがそう言うと、チビはふっと視線を逸らし、あたしの後ろを見た。銀と赤がこつちを見ていて、目が合うとすぐに顔を背けてしまった。チビはまた大きな瞳であたしに何か言おうとしている。わかってるよ、あのふたりにも協力してもらおうってんでしょ？

あはしはまず銀に頼むことにした。箱に入れた大切な写真と雑誌の切れ端を全部と、チビの黒い紐を見せて、身振り手振りで説明する。自転車に乗りたくない？ 作ろう、きつと作れるよ。すると銀は、毛の生えてないつるつとした顔の眉間のあたりにしわを寄せ、記事の字を指でとんとんと叩いた。そして妙にぼこぼことした発音で何か言った。もしかして銀には読めるの？ 銀は青い唇の端だけで笑うと、赤のところへ向かった。

95 赤は腕を組んでむっつりしている。外見だけは一番あたしと似ているのに、話しかけるのは一番難しい。あたしは謝らなければならぬ。でもどうやって？ あたしが知ってるのは頭を下げるやり方だけど、もしかすると赤にとっては意味が違いかもしれない。まごついていてると銀に背中を押され、あたしはそのままの勢いで頭を下げた。ごめん、とあたしは言った。ひどいことを言っでごめんなさい。

すると赤は口をぎゅっつつぐんだまま立ち上がって、緑の家から出て行ってしまった。外はまだ雨が降り続い

100 出している。あたしはしばらくぼうつと、突き刺すように鋭く重い雨を眺めて、そして考えるよりも先に外へ駆け出していた。

小さな虫ほどもある巨大な雨粒が勢いよく肌に当たって、体中が痛い。まぶたの上に手をかざして目を守りながら、あたしは赤の姿を探した。自転車を作りたかったし、何よりも胸のあたりのもやもやを取り去れるのは、赤だけだとわかっていたから。

105 幅の狭い道を歩き、盛り上がったコンクリートの塊を乗り越え、服の中までびしょ濡れで体が冷えてきた頃、赤を見つけた。赤はよその家の茂みに手をつき込んで、何かを掘り返している。あたしが声をかけると赤はちらつとこつちを見て、また探しものに戻った。あたしは怒鳴られなかったことにほっとしつつ、近づいてその手元をのぞき込んだ。

110 すると赤は泥だらけになった何かを手のひらに載せて、あたしに見せてくれた。四角いブロックがふたつ。そして間延びした発音で何か言う。意味は正確にわからないけれど、考えていることは雨が土にしみこむようにすんなりと理解できた——自転車のペダル。赤も自転車作りに加わってくれるみたいだ。

⑦ こうしてあたしたちは自転車作りに取りかかった。

115 朝の収集の時間に、あたしたちはめいめい、自転車の部品になりそうなものを探した。銀が雑誌の字を読み、絵に描いて説明してくれた構造を参考にして、瓦礫の下をあさり、汚れた水の底をさらい、親切な人と物々交換して、集めに集めた。とにかくたくさん必要だったのは太くて頑丈な筒だ。銀の肌みたいに輝く硬い筒、少しべたべたする黒い筒、軽いけど思い切り叩いてもひびすら入らない黄色の筒。これらを金属の板でつないでネジで留め、まずは自転車らしい形を作った。

120 こまごました部品や、部品をつなぐための道具は、チビが日頃から収集していたがとて役に立った。これまでは、そんな小さな手じゃ使えないものばかり持ち込むなんてばかじやないかと思っていたけれど、今はすべてが宝物だ。赤の大きくて力強い手に握られ、息を吹き返した道具たちに、チビは真っ黒い口を大きく開けて、ぼんぼんと不思議な笑い声を立てた。

125 肝心の車輪や動力となるペダル、そしてチェーンを作るのは、かなり大変だった。チビが最初に拾った黒い紐は、一本はゴム製だったけれど、もう一本はただの布紐で、銀に代わりを見つけて来ないとダメだと言われた。しかし代わりはなく、結局ゴムの端切れを地道に集め、銀のペンキと交換で手に入れた接着剤を使って貼り合わせ、タイヤにした。タイヤの空気は、赤が髪と同じくらいに顔を真っ赤にして息を吹き込み、ばんばんにした。

130 ペダルと後ろの車輪に噛ませる歯車は、薄い金属の円盤の真ん中に穴を開け、二十四本のネジをぐりりと並べで作った。ネジを均等に並べるには壊れた鳩時計の円盤を使った。それから銀がネジとネジの間隔を棒を使って測り、そのとおりに頑丈で太い紐を等間隔に結んで連ね、ネジの歯車にうまく噛み合うようにして、チェーンにした。歯車の穴に太い銀色の筒を差し込み、赤が土から掘り返したブロックを両側に留めて、ペダルが完成した。

135 あたし自身は何をしていたかつて？ 自転車の写真は役に立ったかもしれないけれど、字を読んで説明してくれたのは銀だ。あたしは赤がネジを回すのを手で支えたり、足りない部品を探し回ったり。だいたいしたものを見つけたらなかった。サドル代わりの薄汚れたクッションを見つけたのは銀だし、タイヤのホイール代わりのゴミ箱の蓋は、チビが数日ばかりで転がして持ち帰ったものだ。あたしは物探しの才能がないらしく、拾ってくる部品はたいてい役に立たなかった。

140 他の三人が集中して作業している間に、あたしは水を汲んで緑の家に運び、いつでもみんなが飲めるようにした。ついでに食料も調達したけど、あたしの好物であるハユの実や卵白虫はみんなの口に合わないとはじめて知り、うんざりするようなママネの幼生やトウクの葉、ヒョートンパウロの樹液をこそげ取ってきた。⑧ そのうち、食料の調達は順番で全員がやるようになり、あたしが赤に代わってネジを回して留めたり、チビにいいものを見つけたら教えてくれたりした。

145 どうしても構造がわからず、材料も見つからなかったのは、「ブレイキ」というものだった。けど、足で止めれば大丈夫だろう。

150 自転車をつくりはじめてからどれくらいかの夜が訪れただろうか。空気が少しだけ涼しくなり、ハユよりもドートの実が美味しくなる頃を過ぎ、また乾いた熱風が吹いた。ある**ばん**、あたしはふいに目が覚めた。遠くでカラスが鳴き、カイクの壁から虫の声が聞こえてくる。横ではチビと赤が眠り、足下には見張り当番の銀がうつらうつらして、長い銀髪が揺れていた。あたしはそっと上半身を起こした。重なり合う葉っぱの隙間から月明かりが漏れ、家の中とあたしたちをまるごと青く照らす。

あたしたちは緑の家の真ん中で、獣の家族みたいに固まって眠っている。⑨ 床に引いたチョークの線はいつのまにか、ほとんど消えていた。その代わりに以前のテリトリーの間を行ったり来たりする大きな違う足跡が、数え切れないほど続いている。そしてその先には完成間近の自転車が、青白く輝いていた。やがてその日が来た。

自転車はとても醜^{みにく}かった。写真のかっこいい自転車とも、あの夜大人たちに奪^{うば}われたピンクの自転車とも違って、すごく不格好^{ふかく}だった。ハンドルの高さ^{たかさ}と長さは左右で違うし、サドルは大きすぎ、車輪はつぎはぎだらけだ。部品の色もぐちゃぐちゃで、ペダルを回すとチェーン代^{しろしろ}わりの紐^{ひも}が悲鳴^{ひなめい}を上げる。とてもひどい。でも⑩あたしはこの自転車が好^すいだ。

銀^{ぎん}が細い手でハンドルに触^ふれ、ぎゅつと握^{にぎ}る。そしておもむろに前へ押し出し、自転車はかたかたと音を立てながら、思ったよりもなめらかに進んだ。あたしはお互いの顔を見合^あってから、銀と自転車の後に続いた。できるだけ瓦礫^{がれき}の少ない道を選んでいううちに、あたしは川に出た。雨水は茶色く汚^{よご}れ、虫やカエルがたくさん捕^{とら}れる。

川べりに立ったあたしたちの自転車は朝日に、ハンシヤして、何度まばたきしても眩^{まばゆ}かった。すると、てつきりはじめに乗るんだろうと思^{おも}っていた銀が振り返^へって、細い草を四本抜き、くじを作^{つく}った。あたしが震える指でつまんだくじの先^{さき}つぼには、丸い結び目^{むすぶめ}があった。あたりだ。

うっかり自転車を壊^{こわ}さないように慎重^{しんじやう}にまたがって、サドルに腰を下ろす。自転車の乗り方は写真で見ただけ、ペダルに両足を乗せようとすると、ぐらぐらして転びそうになった。こんなに難しいなんて！ 何度も挑戦^{ちせん}しては右に左に傾^{かたむ}き、みんなの視線を感じた。どうしよう。早く乗れよと思^{おも}っているかも、下手クソと思^{おも}っているかも。

じわじわと溜^{たま}る涙^{なみだ}を堪^{こら}えながら、もう一度右足をペダルに乗せる。そして地面から左足を離^{はな}したその瞬間、急に体が安定した。赤^{あか}があたしの肩^{かた}を、銀がハンドルをしっかりと支^さえてくれている。そして自転車の先にはチビが手を振^はって、こっちだよと招^{まね}いている。

あたしはゆっくりと両足を踏み、ペダルを漕^こいだ。車輪が軋^きみながら転がる。赤と銀があたしの体を支えたまま一緒に進む。わかったのは、おそろおそろより思い切^きって漕^こいだ方が転ばないということだ。あたしは次第^{しだい}に怖^{こわ}くなくなり、ぐんぐんペダルを漕^こいだ。気がつく^{つく}ると赤と銀の手が離^{はな}れ、チビを追^おい抜き、あたしはひとりで自転車に乗^のっていた。

ものすごいスピードで風景が動^{うご}く。足で走るよりも速く、足下の茂^{うっそう}みが、石ころが、鬱蒼^{うっそう}と茂^もる木々が、あつという間^{かん}に通^{とほ}りすぎ、風が頬^ほを撫^{なで}で、服や髪をあお^{あお}ってはばたばたと音が立^たった。サドルの座^{すわ}り心地は悪^{わる}く、全身^{しんしん}ががたがたと揺^ゆさぶられるけど、まるで気にな^ならなかった。こんなに速く動^{うご}いているのに、息^{いき}が切^きれていない。あたしの体の奥底^{おくそこ}から笑^{わら}い声^{こゑ}があふれ出^でて、茂^もみの前^{まえ}を横切^{よこぎ}ると、緑の小鳥^{こどり}が弾^{はじ}むように飛^とんできた。小さな

翼^{つばさ}であたしの頭の上を一周して、風に乗^のって遠くまで飛^とんでいく。つられて空^{そら}を仰^{あお}げば、朝のやわらかな青色に浮^うかぶ、ピンク色をd^だびた細長い雲^{くも}が、あたしのスピードに合わせてついてきた。

その時、後ろからみんなの叫^{こゑ}び声^{こゑ}がして、あつという間もなく転んでしまった。やっぱりちゃんとブレーキを作るべきだったのかもしれない。あたしはまともに横倒^{よこたふ}しになった。慌^{あわ}てて自転車を起^たててみると、自転車はほとんど無傷^{むきやう}だった。不格好な自転車は平然^{へいぜん}として、誰^{たれ}よりもたくましく見えた。

今度は銀が自転車にまたがり、あたしと赤が支^さえて、銀は出発^{しゅつぱつ}した。太陽の光^{ひかり}で彼女の体^{からだ}がきらきら光^{ひかり}り、自転車とまるでひとつになったみたいだった。最後は赤がチビを背^お中に負^おぶって、自転車を漕^こいだ。

⑪風^{ふう}に木々の梢^{さか}が揺^ゆれ、幹^{かん}に絡^{かか}まったカイブの葉^はつばがさらさらとこすれ合う。タイヤが川沿^{かわぎわ}いのぬかるみに轍^{くわ}を作り、泥^{どろ}をはね、きゆうきゆうとペダルが鳴^{なり}き、チェーンが軋^{かた}んで、みんなの笑^{わら}い声が重^{おも}なると、聞いたことがないほど美しい音楽^{おんがく}になった。

あたしたちは緑の家^いよりもずっとずっと遠くまで行^いける。行^いったことのない場所へ行^いけるなんて、想像^{さうぞう}しただけで胸^{むね}がどきどきした。

だからこそあたしはやらなければならぬことを思^{おも}いついた。

⑫チビが赤の肩^{かた}に乗^のって戻^{かへ}ってきた時^{とき}、あたしは言^いった。今度はチビのサイズに合う自転車を作^{つく}ろう、と。だつてチビはまだ自分でペダルを漕^こいでいないから。言葉^{ことば}はまだ正確^{せうさく}には伝^{つた}わらないけど、ひとつふたつ手振^{てふり}りを加^くえれば、チビは大きな目^めをもつと見開^{みひら}いて、ちよつと不安^{ふあん}げにあたしと自転車を交^{まじ}互^ごに見比^{くら}べた。

本当に？ 一台^{いちたい}だけでこんなに大変^{たいへん}だったのに、もう一台^{いちたい}？

大丈夫^{だいじやうぶ}、何台^{なんたい}でもできるよ。あたしはそう言^いった。だつてあたしたちはもう、本物^{ほんぶつ}の自転車を作^{つく}ったことがあるんだから。

(深緑^{かみどり}野分^{のわき}『緑の子^{きよこ}どもたち』より)

(語注) ※① タンクトップ：肩^{かた}がむきだしになる上半身用の服 ※② テリトリー：なわばり

※③ 瓦礫^{がれき}：こわれたもののかげら

※④ 鳩時計^{はとどけい}：柱^{はしら}やかべにかける時計の一種

※⑤ ホイール：自転車のタイヤをはめる円形の枠^{わく}

※⑥ 轍^{くわ}：車輪^{くるまわ}の通^{とお}った跡^{あと}

〔設問〕 解答はすべて、解答らんにおさまるように書きなさい。句読点なども一字分とします。

一 線 a 「サンサク」(71行目)、b 「バン」(143行目)、c 「ハンシャ」(159行目)、d 「オ」(178行目)のカタカナを、漢字で書きなさい。

二 1～24行目の部分を読んで、次の問いに答えなさい。

(1) 線①「全員、使う言葉が違う」(3行目)とありますが、他の三人の言葉を聞くと「あたし」

の気持ちはどうなりますか。それがわかる十字の表現をぬき出しなさい。

(2) 四人は家の中ではどのように暮らしていますか。簡潔に説明しなさい。

(3) 四人が住む家の外はどのような様子ですか。説明しなさい。

三 線②「嵐が過ぎ去る」(58行目)とありますが、この場合、「嵐が過ぎ去る」とはどのようなことを表していますか。説明しなさい。

四 線③「ピンク色の自転車」(61行目)とありますが、四人にとって「ピンク色の自転車」はどのようなものだと「あたし」は考えていましたか。簡潔に説明しなさい。

五 線④「最初からうましかった」(66～67行目)とありますが、「無関心の方がまだ良かった」と「あたし」が思うのはなぜですか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア 以前はおたがい理解はしあえないものの、かわらずにいられたので気が楽だったが、けんかをきっかけに三人の気配がどうしても気になりはじめ、息がつまるようになったから。

イ 以前はおたがい嫌いなながらも、言葉が分からなかったのでけんかにならなかったが、言葉の意味が伝わったことをきっかけに三人をのりたくなり、気が立つようになったから。

ウ 以前はおたがいのことがよくわからなくても、相手を尊重していたのでおだやかに過ごせたが、けんかをきっかけに三人との好みの違いがはつきりし、目ざわりに思うようになったから。

エ 以前はおたがいに本当は好意を持ちながらも、無関心をよそおっていたので心が乱れなかったが、けんかをきっかけに三人の嫌な部分ばかりが目につきはじめ、気が重くなったから。

六 線⑤「すぐそばにはうしろ差し出してきた」(74～76行目)、線⑥「手招きされるまゝ見せてもらった」(83～84行目)とありますが、これらの「チビ」の行動から、「あたし」に対するどのような思いが読み取れますか。「テリトリ」という言葉を使って、説明しなさい。

七 線⑦「こうしてあたしたちは自転車作りに取りかかった」(111行目)とありますが、「あたしたち」が自転車作りに取りかかるまでに、「あたし」はどのようなことをしましたか。ていねいに説明しなさい。

八 線⑧「そのうち教わったりした」(137～139行目)とありますが、このことは四人がどのようなことを表していますか。次の中からふさわしいものを一つ選んで記号で答えなさい。

ア それぞれが自分で自分の生活を支え、特技を生かして自転車作りをすることで、自立した生活を営めるようになった。

イ 生活を支えるため、苦手な作業にも積極的に参加するようになり、たがいに競争しながらはげましあう関係になった。

ウ おたがいの生活を支えあい、全員が自転車作りの作業に参加できるようになることで、協力関係がさらに強くなった。

エ 生活のすべてを全員が共同で行い、仕事を平等に分担することで、前よりも効率よく作業を進められるようになった。

九 線⑨「床に引いたく続いている」(147～149行目)とありますが、「以前のテリトリの間を行ったり来たりする大きな違ふ足跡が、数え切れないほど続いて」、「チヨークの線」が「消えていた」ことは、どのようなことを表していますか。説明しなさい。

十 線⑩「あたしはこの自転車が好きだ」(153～154行目)とありますが、なぜ「あたし」は「この自転車」が好きなのか。「あたし」の気持ちをふまえて、説明しなさい。

十一 線⑪「風に木々の梢が美しい音楽になった」(184～186行目)とありますが、「あたし」は「美しい音楽になった」この時間を、どのようなものだと感じていますか。さまざまな音が重なって生まれた「美しい音楽」がどのようなことを表しているかをふまえて、説明しなさい。

十二 線⑫「チビが赤の肩にくろいではないから」(190～191行目)とありますが、なぜ「あたし」は「チビ」に「自転車を作ろう」と思ったのですか。173～195行目をよく読み、「自分でペダルを漕い」だ「あたし」がどのようなことを感じたかをふまえて、説明しなさい。

〈問題はここで終わります〉

受験番号	
氏名	

(2 0 1 8 年 度)

国語解答用紙

八

七

六

五

四

三

3

2

二

1

一

a

b

c

d

十二 十一 十 九

(合計)	
------	--

(整理番号)	
--------	--